

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都台東区浅草橋 1-26-8
園名	アスクリゅうほく保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

音の仕組みや楽器について考えたり、実際に試したり演奏する楽しさから好奇心や探求心を芽生えるきっかけ作りをする。

<テーマの設定理由>

普段から何気なく耳にしている音や使っている楽器がどのような仕組みなのかに興味を持ってもらいたかった。また、それらの音からどんな発見があり、自分達で音を作るにはどうしたらよいかを探求する楽しさを味わってほしいためこのテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 11/18 音楽講師と一緒にいる (3, 4, 5 歳)
- ② 11/26 保育士と一緒にいる (4 歳)
- ③ 11/27 保育士や他学年の友達と一緒にいる (3, 4 歳)
- ④ 12/27 音楽講師と一緒にいる (3, 4, 5 歳)
- ⑤ 1/10 音楽講師と一緒にいる (3, 4, 5 歳)
- ⑥ 2/14 音楽講師と一緒にいる (3, 4, 5 歳)
- ⑦ 2/15~3/13 廃材を使って楽器を作る (3, 4, 5 歳)
- ⑧ 3/14 音楽講師と一緒にいる (3, 4, 5 歳)

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ①事象に対する擬音のオノマトペをイメージさせる為「がちゃがちゃどんどん」の絵本を読み聞かせる。
子どもにオノマトペを表現させるためオノマトペになりそうな絵カードを用意し、視覚的に働きかける環境を作る。
- ②前回音楽講師と行ったオノマトペ以外の身近にある生活音や動物の鳴き声はなにかを自室から聞いて絵を描いてみる。
- ③前回音楽講師と行ったオノマトペ以外の身近にある生活音や動物の鳴き声はなにかを自分で探す。また、それらはどんな音に聞こえるかを探求する。
- ④ペットボトルと割りばしを見せずに音を慣らし、まずはどんな素材を使っているかの考えを引き出す。そのあと、出す大きさ、音を出す場所を変え音の違いや変化に気づきやすい環境を作る。新聞紙も同様になんの音かを破って聞かせてから、どのようにしたら音の違いが出るかを考えてもらうため1枚の大きな新聞紙を渡す。
- ⑤前回、身近なものを聞いた為、今回はさらにどんな音が身近にあるかを投げかける。
- ⑥発表会で使った身近な楽器から話を広げ、他にも様々な楽器があることを知らせるためのイラストを用意する。本物の楽器をいくつか用意する。
- ⑦前回調べて知った楽器を自分なりに作ってみる機会を作り、廃材や文具を用意する。
- ⑧前回作った楽器を用意し、みんなで順番に演奏したり、一緒に合奏をしたりする。

4. 探究活動の実践

<活動の内容及び活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

①【3歳】キャンディを舐める、雷鳴、卵を焼く、風船が飛ぶ、赤ちゃんの声、星の瞬き、救急車のイラストカードを見ながら一人ずつ擬音のオノマトペをしていくと、人によって言い方が違うことが分かる。

【4歳】キャンディを舐める、雷鳴、卵を焼く、風船が飛ぶ、赤ちゃんの声、星の瞬き、救急車のイラストカードを見ながら一人ずつ擬音のオノマトペをしていくと、人によって言い方が違うことが分かり、自分の発表の番を心待ちにしている子が多い。笑っている顔は「にこにこ」や「るんるん」など違うことに気付く。同じ顔の絵カードでもオノマトペに違いが生まれ、友達の考えに興味を持つ姿が生まれる。他の顔はなんていうかの問いに対し、様々な意見が出た。

【5歳】キャンディを舐める、雷鳴、卵を焼く、風船が飛ぶ、赤ちゃんの声、星の瞬き、救急車のイラストカードを見ながら一人ずつ擬音のオノマトペをしていくと、人によって言い方が違うことが分かり、自分の発表の番を心待ちにしている子が多い。友だちの言い方を見て、「そっか」と話す子の姿がある。

②笑い声、飛行機、電車、犬、歯磨き（5歳児が磨くところを観察させてもらった）など自分達で意見を出し合い、それを絵に描いて記録をする。その音を聞き、どのような擬音になるかを発表しあう。

③3歳はオノマトペを連想させるイラストの入ったビンゴカードを使い、自分達で見つけに行くことを楽しむ姿がある。4歳はビンゴでのオノマトペを連想させるイラストが入っているマス目と空欄になっているマス目があり、ボールの音、歩く音などの気づきに自分達で気づく事が出来た。

④3歳、4歳、5歳の子どもたちは、音に関する実験を通じて異なる発見をしていった。3歳児は、物の形や大きさが音に影響することに気づき、叩いたりこすったりする方法によって音が変わることを体験しました。また、音の大きさと形の関係についても考えました。

4歳児は、音の違いが物の大きさや模様によるものであることをより深く理解し、ペットボトルの形や模様による音の変化に気づきました。さらに、動作の速さや強さによって音が変わることに気づき、自分で試してみる姿が見られました。新聞紙を使った実験でも、速さや形が音に影響を与えることを発見しました。

5歳児は、音を出す道具としてペットボトルや割りばしを使い、音の違いについてより具体的な予測を立てました。新聞紙の破る速さや丸める時の音の違いを理解し、実際に試して音の変化を観察しました。また、身近な物を使って音探しをするなど、音に対する探求心がさらに高まりました。

全体として、年齢が上がるにつれて、音の違いをより細かく観察し、予測して実験する力が養われていったこと。

⑤3歳からはままと、線路、ブロックなどで音が出るとの意見が出た。保育者が手や足を使わずに出せる音が何かを問うと、洋服をこする、肩を上下に揺らすなどをする子がいた。声を出しながら自分の喉を触るよう伝えると震えていることに気づき、驚く子の姿が見られた。4歳はそれよりもさらに多く意見が出て、リュックのチャックや水の音（水道）、肩を叩く音などの意見が出た。5歳は4歳と同様、部屋にある全ての物にも音があることを知っており、マジックテープをこする音やコップに物を入れると違う音が出ることも発見していた。

⑥発表会で使った楽器から話しを広げ、楽器にも名称があり、音が鳴る仕組みについてイラスト見ながら考えたり答え合わせをしたりした。エナジーチャーム、太鼓、笛、スライドホイッスル、ゴムのイラストを用意し、どのような呼び方であるかを投げかけた。3歳は太鼓、笛、リコーダーの鳴らし方を知っていた。4歳は知っている楽器も多かった為、体鳴楽器、弦楽器、幕鳴楽器などの名称でどこに当てはまるかを投げかけた。すると気鳴楽器は口で拭くからそれは仲間など楽器の特徴から共通点を見つけて楽しむ姿が見られた。5歳も初めは知らなかった呼び名を知り、共通点を持った仲間がどこに当てはまるかを理解することができていた。ピアノが減で動いていることを知らなかったため驚いている様子が見られた。

⑦前回の楽器の名称から自分がどんな楽器を作りたいかを話し合い、必要な廃材を集め、完成させることが出来た。どの子も集中しており、友達と相談し合う子や、自分で想像を膨らませて作り上げる子など様々な姿が見られた。

⑧再び楽器の名称の問題を投げかけられ、3歳は忘れていた子もいたが、4歳5歳はお互いに助け合って回答を答えることができていた。その後、自分で作った楽器を使い、どんな音が出るかを個々で発表し、そのあとに演奏会をして、楽器の楽しさを触れるための機会を作った。どのクラスも喜んで真剣に演奏していた。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ①各学年とも人によってオノマトペの表現が違う事を知り、関心を持っているようだった。外へ出たときに身近で起きる事象がどのようなオノマトペになるかを調べたいと思う。
- ②室内でもたくさんの生活音や動物の鳴き声が出たため、戸外でも積極的に行っていきたい。
- ③引き続き、3歳、4歳ともに身の回りにある音を探してオノマトペに対する関心を高めていく。次回は自然物の音だけでなく物で音を出した時の楽しさを体験してもらい、興味と関心を引き出していきたい。
- ④全体として、年齢が上がるにつれて、音の違いをより細かく観察し、予測して実験する力が養われていったと感じた。3歳児は、身の回りの物を使って音を出す楽しさを発見し、音の予測ができないことが面白いと感じていた。園内で音を出すものを探すことに興味を持ち、音の探求が始まったのでさらに探求活動をいれていきたい。4歳児は、比較する対象が増えることで興味が広がり、別の活動と関連付けて新しい発見をする姿が見られた。共通点から新たな気づきを得る環境づくりが重要であると感じたので関連づけられた楽器を取り入れてみたい。
5歳児は、音を聞いて物を予想できるようになり、オノマトペを使って音を表現する力が高まった。音を言葉で表現する楽しさを感じ、さらに発展的な活動ができるよう展開していきたい。
- ⑤身近にあるもので音が奏でられることを知る機会が作れた。自分達でどんな音があるかを発見してもらい、学年があがるごとに細かく音を見つけることが出来ていたのでそれらを他の学年にも共有していく。
- ⑥発表会で楽器を使ったため、楽器の名称をイメージしやすいものが多かったのでそこを繋げられて良かった。やはり、イメージだけではなく実際に物を見せた方が子ども達のひらめきや関心が高かったので物を使った活動を引き続き行っていきたい。
- ⑦身近にある音が出るものとしていたため、廃材を使った楽器作りにしたが、子ども達自身でよく考えて作成していた。弦楽器、膜鳴楽器などの共通の楽器を知る機会がきっかけでそれに近い楽器を作る子が多かった。
- ⑧子ども達自身で作った楽器から様々な音が出たため、探究活動としてとても良かった。引き続き、音に対する興味や身近にある音に対する探求心を高められるよう活動のなかに取り入れていきたい。

【3歳】













【5歳】







とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都台東区浅草橋 1-26-8
園名	アスクリゅうほく保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

3 歳児とボールの仕組みやボールを使った動きについて考えたり、実際に試したりする楽しさから好奇心や探求心を芽生えるきっかけ作りをする。

<テーマの設定理由>

普段から何気なく使っているボールについて大きさや形、重さの違いだけでなく、人の動きと比例してどのような変化があるのかを探求し、自分で体験しながら学ぶ楽しさを伝えられると思い、設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 11/25 体操講師と一緒にいる
- ② 12/23 体操講師と一緒にいる
- ③ 1/27 体操講師と一緒にいる
- ④ 2/10 体操講師と一緒にいる
- ⑤ 3/10 体操講師と一緒にいる

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ① 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため形と素材やサイズが異なるボールを複数用意する。
- ② 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため素材は同じで大きさの異なるボールを複数用意する。
- ③ ボールを複数個用意する。
- ④ ボールを複数個用意する。
- ⑤ ボールを複数個とマットを用意する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①子ども自身の想像や発見を引き出すためにいくつかの問いを投げかけ、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
いくつかのボールを比べてみる/ボールには何が入っているか/どのボールが一番遠くに飛ぶか/どのボールが一番早く飛ぶか
- ②サイズの違うボール2個を用意し、大きいボールと小さいボールはどちらが遠くに投げられるかを問い、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ③投げる、蹴る、転がすという動作を使い、ボールを飛ばすやりやすさ、飛ばしやすさはどうであるかを投げかけ、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ④ボールを投げる距離と投げ方がどのように比例するか、投げる強さはどうかについての問いを投げかけ、その考察と自分の体験後のボールの動きの結果を知る。
- ⑤前回の問いについて復習し、再び投げてみる。

〈活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

- ① ボールの中には何が入っているかに対し、石や空気と考える。実際に中身を抜き、フシューという音から空気が抜けたことに気付く。空気を同じ秒数入れ直し、同じ大きさのボールでも素材が違くと重さが変わる事に気付く。フニャフニャのボールは軽い、硬いボールは重いことに気付く。投げやすさは軽い方が投げやすいことに気付く。子ども達は大きいボールを好み、ボールの大きさによって投げやすが違ふ事に気付く。
- ② どちらが飛びそうかという予想に対し、半々の意見が出た。何故かという問いに対し、「軽いから」「大きいと重いから」「両手でなげるから」など様々な意見が出た。友だちと自分の考えを聞いた上で投げ比べてみると「小さいと片手で投げられる」「両手だとうまくとばせない」「小さいと遠くにとんだ」などの意見があり、大小のボールを投げ比べてみて、小さいボールの方が投げやすいという感想が多かった。投げ方を変えたら？という問いを投げかけると遠くに飛ばせるやり方を見つける子の姿があった。片手投げは難しいという意見も出た。小さいボールを使って遠くに投げる練習をすると友だちの投げ方を見ながら工夫する姿が多く見られた。
- ③ 蹴る、転がす、投げるには足をどのように開けばいいかをグーチョキパーの選択肢を与え、考えてもらう。一番多かった意見は、投げるはチョキ、蹴るはチョキ、転がすはパーとチョキであった。反対にグーにするとどれもやりづらいと自分で気付く子が多かった。次にボールを投げやすくするための的を用意し、腕の動きについて問うと、片手で持てる子は片手、ボールが持てない子は両手で投げると投げやすいことに気付いた。蹴る動きは足を後ろに下げた方が蹴りやすいと誰もが知っていた。転がすのはパーの足のまま両手で転がすことがいと 1 人が気付き、それに続いてどの子もやってみてやりやすいことを発見していた。
- ④ マットで囲った場所を用意し、そこに投げることでやり方を考察できるようにした。片手、両手投げをしていくなかで上からと下からどちらがいいかを考える子が疑問を持ち、それをグループ内でやってみようとする姿が見られた。結果、囲いから近い時は弱く（優しく）、遠くからは強く投げる方がいいという意見が多数になった。
- ⑤ 前回同様と変わらない結果になり、自分達の考察はあっていたと自信を持って発表する子が多かった。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ① 次回はどのようにボールを扱えばより遠くに投げやすいかを宿題としたため、子ども達のボールに対する探求心をさらに広げていきたい。
- ② 投げ方、遠くに飛ばせるかどうかは大小に関係なく個人差があったものの、友だちの動きを観察してやってみようとする姿が多く見られた。遠くに投げる練習を遊びの中で取り入れつつ、ボールに対する動きや飛ばし方に対する関心を高めていきたい。
- ③ 足の開き方について選択肢を与えたのでそこから考察することがスムーズに出来た。的があった方が投げる距離などが分かりやすく子ども達自身に伝わっていた為、目印になる物を次回も用意する。
- ④ マットを用いて行い、前回同様距離を測る際に子ども達自身が分かりやすく理解をしていたため次回も用意する。友達の意見を聞いて自分もやってみようとする姿が見られたため、話し合う場や友達の動きを見やすい配置にすることは継続して行きたいと感じた。
- ⑤ 前回同様の結果になり、子ども達が自分の考察について自信を持つ姿が見られた。比較のしやすさを子ども自身で考えられるよう促しながら、発見ややってみる機会を引き続き保育の中に取り入れていきたい。





とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都台東区浅草橋 1-26-8
園名	アスクリゅうほく保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

4 歳児童とボールの仕組みやボールを使った動きについて考えたり、実際に試したりする楽しさから好奇心や探求心を芽生えるきっかけ作りをする。

<テーマの設定理由>

普段から何気なく使っているボールについて大きさや形、重さの違いだけでなく、人の動きと比例してどのような変化があるのかを探求し、自分で体験しながら学ぶ楽しさを伝えられると思い、設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 11/25 体操講師と一緒にいる
- ② 12/23 体操講師と一緒にいる
- ③ 1/27 体操講師と一緒にいる
- ④ 2/10 体操講師と一緒にいる
- ⑤ 3/10 体操講師と一緒にいる

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ① 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため形と素材やサイズが異なるボールを複数用意する。
- ② 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため素材は同じで大きさの異なるボールを複数用意する。
- ③ 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため素材は同じで大きさの異なるボールを複数用意する。
- ④ ボールを複数個用意する。
- ⑤ ボールを複数個とマットを用意する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①子ども自身の想像や発見を引き出すためにいくつかの問いを投げかけ、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
いくつかのボールを比べてみる/ボールには何が入っているか/どのボールが一番遠くに飛ぶか/どのボールが一番早く飛ぶか
- ②サイズの違うボール2個を用意し、大きいボールと小さいボールはどちらが遠くに投げられるかを問い、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ③投げる、蹴る、転がすという動作を使い、ボールを飛ばすやりやすさ、飛ばしやすさはどうかを投げかけ、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ④前回考察した遊びから、どんな遊びだったらボールの良さを活かすことが出来るかを問い、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ⑤玉入れで一番入るのはどれかを問い、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

- ① ボールの中には何が入っているかに対し、空気やおもちゃと考える。実際に中身を抜き、フシューという音から空気が抜けたことに気付く。ベコベコになり、まだ何か入っているかもしれないと疑問を持つ子がいたため触って確認してもらうと何もはいついていないことに気付く。空気の量によって投げやすさ、とびやすさが変わるのかを問うと変わると予想する意見が多かった。蹴る、投げるだとどちらが遠くに飛ぶかに対し、蹴る方が飛ぶと予想する意見が多く、やってみると空気が入っていないとどちらも全く飛ばず、パンパンに空気が入った状態だとどちらも遠くに飛ぶということに気付くことができた。
- ② どんなボールがよく飛ぶかという問いを投げかけ、「小さいボール」「大きいボール」「重いより軽いもの」というイメージが出た。小さい方が良くとぶという予想は全員が同じ意見であり、実際に自分で投げてみるとよく飛ぶことが証明できていた。ビーチボールを用意し、掴むとへこむことに気づき、へこんでいると掴みやすそうという意見が出て、それらに対し同意する意見が多く出たため、実際に自分で投げてみると片手でもしっかり掴んで投げられるし投げやすいことを発見することが出来た。ビーチボールは途中で止まりやすく、キャンディボールは止まらずに転がることを問い掛けると、「へこんでるから」「少しボコってしているから」と形の違いに気付く意見が出たため、子ども達の中で「へこんでいるほうが投げやすい」「転がるには丸くないと進まない」という結論が出た。
- ③ 蹴る、転がす、投げるには足をどのように開けばいいかをグーチョキパーの選択肢を与え、考えてもらう。多かった意見は、投げるはチョキ、蹴るはチョキ、転がすはパーとチョキであった。投げ方と蹴り方が同じでも大きいボールと小さいボールの飛ぶ速さが違う事が分か空気重さの違いで飛ぶ距離が違うのではないかという意見が出た。大きいボールは当たっても怖くない、小さいボールは投げやすいことを発見し、順に体験することで考察が正しかったことに喜ぶ子の姿が見られた。

④ 図*1を参照 小⇒小さいボール 大⇒大きいボール
 結果…転がしドッチボールで投げるなら小、逃げるなら大。

爆弾ゲームは小がやりやすい

PK は大がやりやすい

⑤まずはマットを囲った穴を作り、玉入れのように投げるためのやり方、ボールの大きさはどれが良いかを考察してもらう。結果、大ボールは大きいから入りやすい、中ボールは持ちやすいから入る、小ボールは持ちやすいから入るなどコントロールが上達しており、入りやすさではあまり差がなかった。次に投げる距離を遠くと近くで選択肢を与え、近すぎるとぶつかる、遠いと届かないなどそれぞれが自分の考えを試していた。次に投げる方法として下からと上からという選択肢を与えると、それぞれで考え、玉入れは小さい方が投げやすく近すぎない距離でなげると囲いにぶつからずに入りやすいことを自分達で導き出すことが出来た。

① 投げた場合 ②逃げる場合 ③蹴る場合

ゲーム	大きいボール	小さいボール
転がしドッチボール	① もちにくい ② ゆっくりで当たりにくい ② 早くてもゆっくり	①投げやすい ②早く来るから逃げづらい ②小さいから逃げやすい
爆弾ゲーム	①大きくて落ちやすい	軽くて持ちやすくて早く渡せる
PK	7/10人中 成功 大きくて蹴りやすい	4/10人中 成功 蹴っても小さいし思いつき蹴ると凹むから蹴りづらい

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ① 空気の有無で違いが出ることに気付けたため、次回は大きさによっての違いはなんなのかをテーマとして行いたい。
- ② 素材によって飛ばしやすさに気付くことが出来たため、次回は大小で比べたい。どうやって投げるかを問うとどんな投げ方がよいか、足のポーズはどうする？など身体の動きに対して考える姿が見られたため、関心をさらに高めていきたい。
- ③ 空気の重さについて気づき、大きいボールと小さいボールのそれぞれの良い所に気付くことが出来た。次回は大小のボールに合った最適な遊び方について投げかけていきたい。
- ④ 実際に比べることで子ども達自身の気づきや発見に繋げることが出来、自分達でやり方を展開していた。次回は別の遊びを取り入れ、さらに探求心ややってみたいという気持ちを育んでいきたい。
- ⑤ 子ども達同士で話し合いをしていくなかでいくつかの選択肢を与えると話が発展することが出来ていたため、今後も必要に応じたアドバイスや疑問を投げ子ども達自身が発見や試してみることの楽しさを味わえるようにしたい。





とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都台東区浅草橋 1-26-8
園名	アスクリゅうほく保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

5歳児童とボールの仕組みやボールを使った動きについて考えたり、実際に試したりする楽しさから好奇心や探求心を芽生えるきっかけ作りをする。

<テーマの設定理由>

普段から何気なく使っているボールについて大きさや形、重さの違いだけでなく、人の動きと比例してどのような変化があるのかを探求し、自分で体験しながら学ぶ楽しさを伝えられると思い、設定した。

2. 活動スケジュール

- ① 11/25 体操講師と一緒にいる
- ② 12/23 体操講師と一緒にいる
- ③ 1/27 体操講師と一緒にいる
- ④ 2/10 体操講師と一緒にいる
- ⑤ 3/10 体操講師と一緒にいる

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ① 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため形と素材やサイズが異なるボールを複数用意する。
- ② 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため素材は同じで大きさの異なるボールを複数用意する。
- ③ 比較することに対する疑問や発見を見つけやすくするため素材は同じで大きさの異なるボールを複数用意する。
- ④ ボールを複数個用意する。
- ⑤ ボールを複数個とマットを用意する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①子ども自身の想像や発見を引き出すためにいくつかの問いを投げかけ、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
いくつかのボールを比べてみる/ボールには何が入っているか/どのボールが一番遠くに飛ぶか/どのボールが一番早く飛ぶか
- ②サイズの違うボール2個を用意し、大きいボールと小さいボールはどちらが遠くに投げられるかを問い、ボールだけではなく、人間の体の仕組みを考えながら遠くに飛ばすためにはどうするかもふまえ、その考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ③投げる、蹴る、転がすという動作を使い、ボールを飛ばすやりやすさ、飛ばしやすさはどうであるかを投げかけ、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ④前回考察した遊びから、どんな遊びだったらボールの良さを活かすことが出来るかを問い、今回は9人の少人数をさらに半分に分け、考察と自分で体験後のボールの動きの結果を知る。
- ⑤自分達の好きなゲーム遊びを通し、ボールについてさらに探求できる環境を作る。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

- ①ボールとは？に対し、投げる物、けるもの、丸いものというイメージが出た。ボールの違いについて問うと大きさ、硬さ、重さ、素材という意見が出た。ボールの中身に対し、全員が空気であること知っていた。どちらが遠くに投げられるかに対し、大きいボール、小さいボールどちらの意見も出た。重さの違いはどんなことから生まれるかについて、硬いボールが一番重いと予想する子が多く、実際に比べると硬さに関係なく大きいボールが一番重いことを体験して気付くことが出来た。投げ比べをする際に用意した様々な種類のボールを比べることにとっても関心を示す子が多かった。どのボールが遠くに届くかを比べるために投げたり蹴ったり転がしたりなど色々な方法を試しながら取り組むことができていた。
- ②1 グループ 3 人ほどのさらに小さなグループに分け、どんな投げ方がいいかのみを投げかける。足はそのままかあげるか、ボールを持っていない手はパーかグーかの意見が出てそれを元に実際にやると足は上げ、ボールを持っていない手はパーにするという結論が出た。その結論をもとに、大小のボールを用意し、小さいボールは壁に当たるほど遠くにとび、大きいボールは手前で落ちてしまう子が多かったことが証明された。そのような結果を分析するよう問うと、「小さくて軽いから」「大きい方が持ちやすいのに小さいほうが軽くてとぶ」と意見が出た。大きい方が安定してとぶが小さい方は方向が乱れてしまうということに気付いた意見も出た。
- ③大中小のボールを見せ、どのボールが一番遠くに飛ばせるかを問うと、「小さいボール！」という意見が多く、理由を聞くと「小さいと軽い」「大きいと重い」「大きくて軽いボールもある。でも大きいと持ちづらいね」「小さいと持ちやすいしなげやすい」「野球ボールは小さいもんね」と様々な意見を話し合った。次に投げ方について問うと、片手、両手、上から、下から、横からという意見が出た。
- ④大中小のボールを順番に使い、足の開き方、投げる位置、それ以外に跳ぶなどの動作を足してみる、など自分達で考え投げる姿が見られた。結果、ジャンプしながら投げなくてもボールは飛び、足を前に出し、体重を移動しながら投げるとよく飛ぶということを自分達の体を使ったり友達の投げ方を見て学んでいた。
- ⑤自分達が日頃から遊んでいるドッチボールをボールの特性や投げ方を考えながら最適なやり方を見つけるよう投げかけた。予想では小さいボールは「すぐ避けられる」大きいボールは「避けるのは難しいし投げるのも難しそう」という意見が出た。実際にやると小さいボールはなかなか当たらない、ボールが速いとなり、大きいボールは早く投げられなかったけど当たった人は多かったという結果になった。ドッチボールはボールを避けると当てるを両方やるゲーム遊びだから中くらいのボールがいいという結論になった。

ドキュメンテーションを参照する

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- ①どのボールが投げやすい、投げにくいなどはあまりはっきりした答えが出なかったため、素材が変わらないもので飛ばし方を比べられるように環境を作りたい。
- ②小さいボールは軽いがゆえにまっすぐ飛ばせないため、どのようにしたらよいか。大きいボールは重くて安定しているが遠くに飛ばすにはどのようにしたらよいかを課題としたため、さらにボールについての追求や関心が高まるようにしていきたい。
- ③年長らしく様々な意見が出て、考察をすることができていた。自分達で意見を出し合う姿が多く見られたため、引き続き子ども達自身で話すことができるよう見守り、次回はそれぞれの大きさのボールでどういった投げ方が一番飛ぶかを考察してもらえよう投げかけていきたい。
- ④投げ方についての考察は自分の動きだけでなく、友達の様子をみて研究のようなやり方で投げ方を考察する姿が見られ、考えるだけでなくやってみることに對しての成長を感じた。次回は自分達が大好きなドッチボールに焦点を当て、よりよいボール選びについて考察し、考えられるよう投げかけていきたい。
- ⑤自分達がやり慣れているドッチボールをボールに視点をのこした考察にすることで子ども達自身がやり方をイメージしやすく、進んで試したりやり直したりする姿が見られたため、引き続き子ども達の身近な遊びからボールでの探求活動をするきっかけづくりをしていきたい。





